

道内各地で進展する地方創生プロジェクトの最前線をクローズアップ！

北海道創生ジャーナル

創る

Vol. **31**

2026.03

その先の、道へ。北海道
Hokkaido.Expanding Horizons.



【写真】共和町マルシェの様子

CONTENTS

- 01 **特集** 未来に引き継ぐ大自然「国立公園」を活かした地域づくり
～日高山脈襟裳十勝国立公園での取組～

事例紹介

平取町／「幌尻岳登山」と「アイヌ文化」を織り交ぜて ～国立公園を追い風とした地方創生の取組～
十勝・日高山脈観光連携協議会／国立公園の多彩な体験と発信による魅力の再発見 ～広域連携による地域活性化の取組～

知事が地域訪問する機会に地域で活躍されている方をお訪ねし、その様子を紹介

- 05 **地域が動く・プロジェクト最前線**
長沼町「ながぬま地域起業塾」による地域課題解決
～「ながぬまローカルチャレンジエコシステム」の創出を目指して～

- 07 **地域のキーパーソン**
共和町／松本 和哉さん
中標津町／株式会社ふるさと開拓ラボ

- 09 **地域を創る人づくり**
北海道立北の森づくり専門学院
～旭川から全道へ若い力で林業・木材産業を支える～

- 11 **「なおみちカフェ」から**
～地域創生のヒントを探る～

根室編 KOBUSTAY
空知編 三笠水素製造プラント

地域に新たな風を吹き込む

- 13 **地域おこし協力隊へのインタビュー**
～若者や女性に選ばれる北海道に向けて～
地域おこし協力隊座談会



特集

未来に引き継ぐ大自然

「国立公園」を活かした地域づくり

日高山脈襟裳十勝国立公園での取組



▲北海道の南端にある「襟裳岬」から望む広大な水平線

国立公園ってなんだろう？

日本の国立公園は、我が国を代表する自然の風景地として、自然公園法という法律に基づいて国（環境省）の指定を受け、管理されています。全国で35箇所が指定されていて、57箇所ある国定公園、300箇所を超える都道府県立自然公園とともに日本の自然公園のネットワークを作り、その中心となっています。国立公園は開発の波から自然を守り、自然とのふれあいの場として誰もが利用できるところであり、年間約3億人もの人が訪れています。

国立公園のしくみは？

国立公園の中には、ほとんど人の手が加わっていないところもあれば、集落や観光地として開発されているところ、農業などの産業に使われているところもあります。そこで、その土地の自然の状態や使われ方によって、公園内を細かく分け、どのように保護していくか定めています。また、利用者などのように自然に親しんでもらうかを考えた上でどこに道路や山小屋などの施設を造るか定めています。

日高山脈襟裳十勝国立公園の指定

エゾナキウサギ、シマフクロウ、ゼニガタアザラシなどの希少な野生生物の重要な生息地であることに加え、日高山脈特有の氷河遺存種や固有植物群が植生するなど、生物地理学的に高く評価されたことから、令和6年6月25日、道内で7箇所目となる新たな国立公園として「日高山脈襟裳十勝国立公園」が指定されました。この公園は、245,668ヘクタール（東京ドーム52,500個分）と国内最大の陸域面積を有し、南北約140kmにわたる日高山脈やホルン（先鋒）などの典型的な氷河地形を含む特徴的な地形が広がっています。また、地表で連続した地質断面を観察できる点も魅力のひとつで、原生的な冷温帯林、高山帯植生、砂丘や海浜植物群落、湿地・湧水地など、多様な生態系が連続的に分布していることも評価されています。

こうした価値を国内外の多くの方に知ってもらうとともに、新たな地方創生の起爆剤として活用していくため、関係する市町村での取組が活発化しています。



▲幌尻岳（平取町）

標高2,052mを擁し、その圧倒的な原生自然と、日本百名山の中でも最難関といわれる挑戦的な魅力が、多くの登山家を惹きつけている。

アイヌ文化を学び、アイヌ民族が持つ自然観や精神性、幌尻岳が神聖な山であることを理解して登ることで、単に山登りを楽しむだけでなく、神社やお寺を巡るような目線でも楽しめるようになり、また、そうすることににより、登山者自身の自然・文化を守ろうとする意識が醸成され、将来的な自然環境や文化の保護にもつながっていくといえます。

こうした理念の下で、平取町では登山



▲幌尻岳登頂記念手ぬぐい

Tシャツなど他のグッズもあります！

国立公園を追い風に、登山とアイヌ文化を織り交ぜた平取町の取組へ、大きな期待が寄せられています。

また、最近では、二風谷コタン^{（にふたに）}で、人気マンガ「ゴールデンカムイ」の実写版映画の撮影が行われ、聖地巡礼として多くのファンが町を訪れるなど、平取町の魅力が世界に向けて発信されています。町の担当者は、この勢いも活かしながら、さらに町へ人を呼び込んでいきたいと意気込んでいます。

国立公園化から1年以上が経過しますが、平取町では、新しい企画を次々と打ち出しています。

町の担当者は、こうした背景を踏まえて「幌尻岳は、アイヌ文化を学んでから登ることで、その登山の価値をより高めることができる」といいます。

さらなる人の呼び込みへ

現在、国や近隣自治体等では、本国立公園の活用について協議が進められており、登山より気軽なロングトレイルなどの可能性も検討されています。登山やロングトレイルは、外国人にも一定の人気があるため、町は、外国人観光客の取り込みも視野に活用していきたい考えです。



▲アイヌ民族の家「チセ」（二風谷コタン）

各チセの東側には祈禱を行う祭壇があり、幌尻岳山頂を向いていると言われている。

日高管内 平取町の取組

「幌尻岳登山」と「アイヌ文化」を織り交せて

国立公園を追い風にした地方創生の取組

国立公園を追い風に

平取町では、町内にある「幌尻岳」を含むエリアが国立公園に指定されたことを追い風に、登山客の誘客やアイヌ文化振興の取組を加速させています。

特に、平取町のふるさと納税返礼品である「幌尻岳ガイド付きプレミアム登山」は、国立公園指定を受けて、予約がすぐに埋まるほど人気に拍車がかかっています。

幌尻岳ガイド付きプレミアム登山

著名な登山家や平取町山岳会がガイドを務め、山荘で「びらとり和牛」などが味わえる平取町のふるさと納税の体験型返礼品ピラッキー！

なお、この取組で得た寄付金の多くは、自然保護活動や登山道整備など幌尻岳に還元されてるピラ！



平取町公式キャラクターピラッキー

アイヌ文化で価値ある登山を

近年、人気の登山スポットとして多くの人を訪れる幌尻岳ですが、アイヌ民族からは「神が住む山」として信仰の対象とされており、かつては「神に遠慮して登らない山」とも言われていました。

国立公園化から1周年

誘客とアイヌ文化振興を1セットと捉え、登山客を事前にアイヌ文化施設に案内するなど、登山客がアイヌ文化に触れる機会を増やすことにも力を入れています。

町や町山岳会では、令和6年の国立公園指定以降、国立公園PR看板の設置や登山道整備、登頂記念Tシャツや手ぬぐいなどのグッズ制作などの取組を進めてきたほか、令和7年8月には、国立公園1周年記念として、登山歴50年以上の登山愛好家としても知られる俳優・ナレーター石丸謙二郎さんを招き、トークショー&記念登山を開催しました。

トークショーでは、登山に造詣が深い石丸さんから、トークのほかピアノ演奏も披露され、来場者は終始魅了されました。また、記念登山でも、参加者は事前にアイヌ文化に触れ、意義深い幌尻岳登山となった様子がうかがえました。



芽室町 めむろ駅前プラザ「めむろーど」から見た日高山脈



▲お話を伺った十勝・日高山脈観光連携協議会事務局(芽室町) 栗城さん

協議会のなりたち
 十勝・日高山脈観光連携協議会は、日高山脈襟裳国定公園の国立公園化が予定されていることを見据え、国立公園の想定エリア内に位置する十勝側の6自治体(芽室町、帯広市、清水町、中札内村、大樹町、広尾町)が連携し、魅力ある自然資源等の洗い出し、広域的な観光ルート開発やイベントの企画・開催などに取り組みことを目的に令和4年度に発足しました。
 「普段、振興局からの声がかけて一緒に参加することはあるが、市町村自らの発案で協力するというのはあまりなく、今後も続けていければ。」と事務局の栗城氏は広域連携の可能性について語ってくれました。

協議会のなりたち

国立公園化に向けた取組

協議会は、外から訪れる人だけでなく、地域住民にも日高山脈の価値や魅力を知ってもらうことを意識しながら国立公園化前から取組を始めました。
 十勝管内6市町村に点在する日高山脈のビュースポットや観光スポットを整理し、それぞれの特性が伝わるよう、パンフレットや動画の制作を行ったり、アウトドアブランド・メンバーが展開する「メンバーフレンドエリア」に「十勝・日高山脈」として登録し、ウェブサイト等を通じた情報発信を行いました。
 また、日高山脈にゆかりのある人々へのインタビューをまとめた冊子「無二」を制作し、十勝観光連盟のホームページ内に特設ページを設けるなど、継続的な情報発信に取り組んできました。



十勝観光連盟HP「無二」特設ページ

十勝・日高山脈観光連携協議会の取組
 国立公園の多彩な体験と発信による魅力の再発見
 ～広域連携による地域活性化の取組～

日高山脈遊覧フライトツアー

国立公園化の1年前にはなりません
が、本協議会初の体験型事業である
「日高山脈遊覧ツアー」を行いました。
た。

この取組は、JALの発案によるも
ので、HACチャーター便で普段飛ば
ない経路を遊覧、日高山脈を違った角
度で触れることで新たな魅力を知る
きっかけとするものです。フライト中
には環境省職員からの日高山脈に関す
るお話があったり、JALのふるさと
アンバサダーからの街の紹介などがあ
り、地域に興味を抱いてもらえるよう
な仕掛けも盛り込みました。

翌年にはHISからの声かけでJA
Lとはまた違った経路で日高山脈を上
空から見るといふ事業を行い、参加者
の日高山脈を満喫する姿が見れた良い
取組であったと実感しています。



▲日高山脈フライトツアーの様子

ガイド人材発掘・育成イベント

国立公園化後、観光ガイド人材不足
の解決の一助を目的として、ガイドに
なりたい人や興味がある人を対象とし
た人材発掘・育成のイベントを実施し
ました。

令和6年度に2回開催し、1回目は
現役ガイドや環境省職員の話を聞ける
機会を作り、2回目にはワークショップ
を加え、一班に一人ガイドを入れて
、直接話が聞けるような形にしまし
た。

この取組により、参加者は知り合っ
た現役ガイド等に相談することで、自
らがガイドを始めるまでのハードルを
下げることが可能となり、また協議会
としては、参加者の連絡先を知ってお
くことで、多くの人へイベント情報の
周知が可能になるなど、新たなつなが
りを生み出すような効果も期待できる
ため、今後も続けていこうと考えてい
ます。



▲ガイド人材育成・発掘イベントの様子
(R7年度第一回)

広域モニターツアーの実施

協議会のモニターツアーは、国外の
旅行者やツアープランナー、万博の
インストラクターなどのツアーに詳し
い人を対象に実施しており、6市町村
の有名どころではなく農場などの自然
を感じられる場所も巡りながら、日高
山脈の魅力を感じてもらい、将来的
な観光ツアーの造成につなげることを
目的としています。

ツアーの行程づくりにあたっては、
山岳登山を主とするのではなく、日高
山脈から流れ出る水が地域の産業や
食、住民の日常の営みにどのように関
わっているのかなど、目の前にある自
然風景と地域資源、暮らしとの関係が
ストーリー性のある体験として伝わる
ような構成を重視しています。

また、「景色」「アウトドア」
「食」「生態系・地質」「文化・歴
史」「暮らし・生業」といった切り口
でテーマを設定し、体験型のイベント
を用意するなど、参加者が日高山脈と
地域の魅力を多面的に捉えられるよう
工夫しています。

ツアー終了後には参加者から専門的
な視点からの意見や感想を得ており、
これらは今後の観光客向けツアー造成
に反映していきたいと考えています。

今後に向けて

協議会では、これまでの取組を通じ
て整理してきた観光コンテンツやガイ
ド人材の情報を活かして、ホームページ
に特設サイトを作成し、動画による
情報発信を行っています。あわせて、
DMO（観光地域づくり法人）や旅行
会社とも連携しながら、ツアー造成や
商品化、受入体制の整備など、本格的
な観光客誘致に向けた検討を重ねてい
ます。

フライトツアーやモニターツアー、
人材発掘の取組は、すぐに成果が表れ
るものではありませんが、今後も、6
市町村が得られた知見を共有し取組を
継続していくことで、日高山脈と地域
の魅力をよりの確に伝えることができ
るものが見出され、来訪者にとって満
足度の高いサービスの提供につながっ
ていくことが期待されます。



▲モニターツアーの様子(令和7年度)



▲東京で行われたキックオフイベントの様子



▲長沼町の町章
中央はローマ字のNを形どると共に特産の粉を表しています。



▲現地視察（フィールドワーク）の様子

長沼町は、これまで企業誘致に力を入れてきましたが、町のさらなる活性化のためには、単純な企業や人の数だけでなく、まちづくりそのものに関わる人をいかにして増やしていくか、それに向けた取組を進めていくことが重要なのではないかという考えに至りました。また、ここ数年は移住者から

ながめま地域起業塾とは

そうした課題の解決に挑戦する町の取組「ながめま地域起業塾」について取材しました。

長沼町の概要と現状

長沼町は空知管内南部に位置する人口約9,800人の町で、東部にはなだらかな丘陵地帯が広がり、西部は見渡す限りの平野が続く緑豊かな田園文化都市となっています。ながめま温泉や道の駅マオイの丘公園、ファームレストランなど、地域資源を活かした多くの観光施設を有しており、農家での農業体験など、農村と都市の交流を目的としたグリーンツーリズムにも力を入れています。他の市町村同様に少子高齢化や人口減少が課題となっています。

起業する方が多いことや、移住イベント等で北海道への移住を検討している方やキャリアアプレンティス制起業したい方が一定数いるとの情報を得ていたことから、町づくりに関わってくれる人材を集める手法として「ながめま地域起業塾」が企画されました。

起業塾は、長沼町へ移住したい方や起業したい人に対し、行政、地域おこし協力隊、地元支援組織、町と関わりのある企業がタッグを組んで、募集することに決めるテーマに沿った支援を行い、地域課題の解決に取り組む人材を発掘・育成することを目的としています。この取組を継続的に高い情報発信で広げていくことで、あらゆる人に挑戦したいという気持ちが芽生え、町の発展のための取組への挑戦が連鎖する「ながめまローカルチャレンジエコシステム」の創出を目指しています。次頁からは起業塾での取組について掲載します。



▲起業塾の公式アカウント（インスタグラム）

ながめま
長沼町

「ながめま地域起業塾」による地域課題解決
〜「ながめまローカルチャレンジエコシステム」の創出を目指して〜

テーマは
「観光 × AI
× ローカル」

長沼町は札幌圏から距離的に近いこともあり、観光に関しては長年日帰り客がメインとなっていました。ここ数年で町内に民泊などの宿泊施設が増えてきたこともあり、宿泊型観光へのシフトチェンジを模索していました。

長沼町に宿泊したいと思える魅力的なコンテンツは何か、町の外からの視点も取り入れていくべきではと考え、長沼地域起業塾の参加者や事業者からアイデアを募ることを期待しました。また、「AIをテーマに組み込んでみて面白いのではないか」との町内企業からの提案も取り入れて、「観光 × AI × ローカル」を令和7年度に初めて募集する起業塾のテーマとすることにしました。

しかしながら、町役場や（一社）まおいのはこ、地域おこし協力隊等の起業塾設立・運営メンバーには、起業の専門スキルやノウハウ、アクセラレータープログラムの動作経験が皆無だったため、「常に試行錯誤・苦労の



▲取材にご協力いただいた長沼町役場政策推進課 一般社団法人まおいのはこ 長沼町地域おこし協力隊 高田係長（左）坂本さん（中）金山さん（右）

連続でした」と長沼町政策推進課の高田係長は立ち上げまでの準備期間を振り返っていました。

ながめま地域起業塾の
人気とプログラム

昨年9月に東京で開催されたキックオフイベントには70名以上の参加があったことから、11月からの本募集もある程度の人気はあるのではと期待が持てました。



▲【起業塾第1回目】Web研修で現地とオンラインのハイブリッド形式で開催。町関係者と塾生の自己紹介の様子



▲【起業塾第2回目】観光施設であるキャンプ場を視察

募集を開始すると、8名の定員に対して20名と倍以上の応募があり、その半数以上が道外からの応募者でした。移住や二地域居住、キャリアチェンジに関心のある層が応募者のメインと予想していましたが、実際には企業に勤めながらの自身のスキルアップや地域活性化・地方創生に関心のある方の応募が数多くありました。プログラムに4回の現地研修を設定したことで、参加のハードルを高くしてしまっただけかと危惧していたのですが、町役場の予想を遙かに上回る嬉しい誤算となりました。

実際のプログラムは、町役場の職員だけでなく、地域の実情や課題を把握している地域おこし協力隊や町にゆかりのある企業が、観光、AI活用、事業計画、財務、資金調達、地元事業者とのマッチングなど、様々な面から塾生をサポートする仕組みとなつていきます。現地研修では町の雰囲気や存在を感じてもらうことに重きを置きつつ、地元事業者との交流を図れるフィールドワークも設定しました。

2月の最終プログラムでは、塾生が自らのアイデアを披露するピッチコンテストが開催され、町の魅力や課題を踏まえ多彩なアイデアが発表されました。優秀なアイデアはサポート企業からの協業や投資を受けることも可能になっていきます。単なるアイデアコンテストとして終わるのではなく、将来に向けて塾生と地域の人々との繋がりが

が作られるような仕組みとなつていくことが特徴です。

長沼町の地方創生

ながめま地域起業塾の取組に対して、町は塾生からの魅力的なコンテンツの提案や、町で新たに活動するプレイヤーが生まれることにとどまらず、関わった町民や事業者にも、「自分たちも何かやってみよう」という意識の変革が広がっていくことに期待を寄せています。地域事業者との協業促進、雇用の創出、地域コミュニティの活性化など、地域にとって好ましい影響を生み出すようなプロジェクトになることを目指しており、そこには長沼町をチャレンジしている地域や人にさらに人や企業が集まるような好循環が生まれる町にしたいという思いがあります。

長沼町は今後も「ながめま地域起業塾」の取組を通じて、持続可能なまちづくりを目指していきます。



▲【ピッチコンテスト】司会を務める高田係長と会場を訪れた町民

地域のキーパーソン

地域を創る人 編

きょうわ
共和町

松本 和哉 さん

共和町道の駅プロジェクト 町民と共に進める交流拠点づくり

踏み出した第一歩

松本さんは札幌市出身で食品関連メーカーの営業として活躍していましたが、生まれ育った北海道で地域活性化に関する仕事をしたという思いを強くしていた最中に共和町道の駅プロジェクトの存在を知りました。

当初、共和町には具体的なイメージを持っておらず、らいでんスイカ、らいでんメロンの産地であることも十分に結びついていなかったと話します。

「良いアイテムがあるのに発信力が弱いのはもったいない」と感じる一方で、「あまり知られていないからこそ伸びしろがある町」だと捉え、町の魅力の発信の基盤となる道の駅づくりに意欲を持ち、転職と共和町への移住を決意しました。



▲株式会社とものぼ 執行役員 松本 和哉さん。地域資源の掘り起こしから道の駅の開業準備・運営まで幅広い業務を担う。

次世代につないでいく、町の魅力づくり

移住後は地域おこし協力隊として活動を始め、町民からは、町に新しい風を吹き込んでくれる存在として、多くの期待が寄せられました。

プレッシャーを感じながらも、町に新しい楽しさを生み出したいという思いがイベントづくりなどの活動の大きな原動力になったと話します。

共和町では冬のイベントが少なかったことから、家庭で作ったアイスキャンドルを持ち寄る参加型イベント「アイスキャンドルナイトinきょうわ」を2年連続で開催しました。

他にも、ハロウィンやクリスマスなど、季節のイベントを通して、町民が交流できる場をつくってきました。

道の駅運営に関する中学生とのワークショップにも力を入れており、「将来は町外で働きたい」と話していた生徒も、特産品づくりのアイデア出しや、道の駅運営を想定したロールプレイなどを通じて意識が変わり、町への関わりに前向きになっていったといいます。

次世代に町の魅力をどう伝えるかも、活動の大きなテーマになっています。

日常の交流から広がる町全体の参加意識

令和4年には道の駅運営会社である株式会社とものぼが設立され、令和6年には道の駅開業前アンテナショップ「とものぼショップ」の運営が始まりました。

同ショップには、町外からの来訪者や帰省中の町民など、様々な人々が訪れ、町の新たな魅力発信の拠点になっていると松本さんは話します。

ガチャガチャを置き、子どもも気軽に遊びに来ることができる空間づくりを行うなど、日常的な交流が自然に生まれる場になるような工夫をしています。

こうした積み重ねが、道の駅開業に向けた「町民全体の参加」につながっています。

町民と共につくる道の駅 未来へ向けた挑戦

令和9年開業予定の道の駅には、ショップ、レストラン、温浴施設、キャンプ場、屋内遊技施設、24時間トイレ、交通情報の発信など、充実した機能が整備される計画です。

松本さんは、町民全員が主体的に道の駅づくりに関わり、一人ひとりが自分事として考えてもらうことを大切にしていると話します。

町民にとつての憩いの場でありながら、小樽とニセコの間地点として、町民と町外から訪れる人々が自然に出会い、交流できる道の駅づくりを目指して開業準備を進めています。



▲松本さんが企画・運営をおこなったアイスキャンドルナイトinきょうわ。幻想的な灯りが広がる。



▲道の駅開業前アンテナショップ「とものぼショップ」店内。松本さんが開発に携わった共和町の農産物を使用した特産品など、多様な商品が並ぶ。



▲道の駅の外観イメージ。地域の魅力発信と憩いの場の創出を目指した設計となっている。

北海道後志西部に位置する共和町は、豊かな自然環境と肥沃な土地に恵まれており、高品質な農産物の生産地です。
そんな共和町で、令和9年度の道の駅の開業に向け準備を進めるのは、株式会社とものぼ 執行役員 松本 和哉（まつもと かずや）さんです。

地域のキーパーソン

地域を創る企業 編

なかしべつ
中標津町

株式会社
ふるさと開拓ラボ



中標津町から始まる、
新しい地方創生のかたち

中標津町とのつながり

㈱ふるさと開拓ラボは、中標津町出身で東京の人材サービス企業(㈱ネオキャリア)で代表を務める西澤氏が、地域の魅力向上や活力ある町づくりなどに取り組むため、令和7年1月に新たに立ち上げた企業です。元々買い物や医療など道東の生活拠点を担う中標津町に高いポテンシャルを感じていた中、㈱ネオキャリアの設立25周年を機に、生まれ故郷のために何かできないかと考え、地方創生の拠点とするために設立しました。そうした経緯もあり、中標津町と㈱ネオキャリアは、令和7年2月に持続可能な地域社会の発展と新たな地域活力の創出に寄与することを目的とした包括連携協定を締結しています。



▲協定調印式で握手を交わす、㈱ネオキャリア代表取締役CEO 西澤氏(左)、中標津町西村町長(中央)、㈱ふるさと開拓ラボ西氏(右)

町で初の取組

地方創生を掲げ、令和7年5月に東京都から移転した㈱ふるさと開拓ラボですが、当初は町内の人脈やプロジェクトなど全く何もない中でスタートでした。そんな中、「中標津町で音楽フェスをやりたい」と熱意を持った方と社員との偶然の出会いをきっかけに、社の初事業として音楽フェス開催に取り組むこととなりました。

西澤氏から現地での差配を任された開拓ラボの西代表は「この初事業は何としても成功させる」との強い思いで取組を進め、町民や町役場とのつながりを創りながら、学生等も含めて運営体制を構築。50日という短い準備期間でしたが、6千人もの参加者を集め、混乱もなく無事に音楽フェスを成功させました。

地域活性化の取組

音楽フェス終了後、新たに2つのプロジェクトを開始しました。

1つ目は、地域情報サイトの作成で、中標津町には、どこに何があって、どんなグルメがあるのかなど、観光情報が一

切ないことに気付き、そのことが根室中標津空港の利用客が、そのまま市町村へ流れている一因でもあったことから、町内の魅力的なスポットの情報を集め、ウェブでの公開が続いています。

将来的には、二次元バーコードを読めば、町のイベントや美味しいお店など、タイムリーな情報が分かるようなプラットフォームを構築したいと考えています。

2つ目は、ジョブインサイドプロジェクトで、㈱ふるさと開拓ラボに所属する「地域おこし協力隊」の社員が町内企業に2週間入り込み、その中で企業の課題を発掘して解決につなげたり、AIの活用方法の提案や導入支援など、幅広い企業支援を行うものです。

具体的には、酪農業のマニュアル作成に着手しており、実際に酪農家が働く様子を撮影してマニュアルを作り、酪農業への参入の敷居を低くすることで、経験がない人でも、すぐに働けるように取組を進めています。



▲音楽フェスの様子

北海道東部に位置し、根室中標津空港を起点に、「道東の玄関口」として地域の交流や賑わいを生む役割を担っている中標津町。
中標津町の発展を目指して役場とともに取組を進めているのが「㈱ふるさと開拓ラボ」です。

㈱ふるさと開拓ラボの今後

㈱ふるさと開拓ラボは、地域プランディング事業や地域ソリューション事業、BPO事業なども抱えており、令和7年度中には、これらの事業の基礎を作り、体制を強化していきたい考えです。

特に、ジョブインサイドプロジェクトは、現在は2週間という短期間で実施していますが、今後は長期的な運用へ移行し、多くの道内企業が抱える人材不足、業務整理の難しさ、DXへの理解不足などの課題を解決していきたいと考えています。

西代表は「町が発展しなければ、ビジネスも生まれません」という考えの下で、まずは地域で継続的に事業を進めることを最優先に据えて、地域と企業の双方一体的な成長を目指し、中標津町が道東の代表となつて、楽しい人が集まる町にしていきたいと考えています。



▲ジョブインサイドプロジェクトの様子



地域を創る人づくり

北海道立北の森づくり専門学院（以下、北森カレッジ）は、北海道の豊かな生態系を育む森林を守り、育て、将来の世代に引き継いで行く、百年先を見据えた森林づくりを推進するという理念の下、林業・木材産業の幅広い知識と確かな技術を身に付け、将来的に企業等の中核を担う地域に根差した人材を育成するため、令和2年4月の開校以来、様々な取組を行ってまいりましたので、その一部をご紹介します。

旭川から全道へ若い力で林業・木材産業を支える

きたもり
北森カレッジってどんな学校？

北森カレッジは、道内の林業・木材産業関係企業等へ就業を希望される方が通う2年制の専門学校です。

定員は40名で、現在は18歳から30代の方まで、幅広い年代の方が通われており、道外出身の方も在籍しています。森林・林業に関する学科を持つ高校や大学出身の方ばかりではなく、普通科の高校等を卒業された方でも、一から林業・木材産業に関わる知識や技術を身に付けることができます。

就職に向けたサポートも手厚く行っており、2年次には2週間の長期就業実践実習（いわゆるインターンシップ）を最大3回行い、実際の業務を体験することで就業後のミスマッチを減らせるよう努めています。

多様なカリキュラム

2年間で行う授業のうち、約4分の3が実習を占め、道内全域をフィールドとして地域の様々な森林や製材工場などで実習を行うことにより、現場での学びを重視した実践力が養成されます。

また、在学中にはチェンソーの特別教育など、最大16の資格等を取得することが可能です。

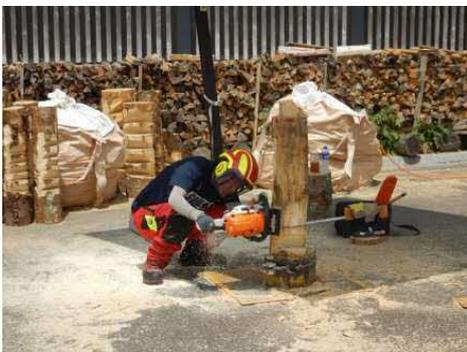
フィンランドとの教育連携

北海道と気候が似ており、林業先進地であるフィンランドの林業専門学校と教育連携協定を結んでおり、高性能林業機械の教育プログラムの開発をはじめ、教員及び生徒の相互交流などの取組を実施しています。

なお、選択制ではありますが、2年次には実際にフィンランドへ研修に行くことができます。



▲地域見学実習の様子



▲伐木造材実習の様子



▲森林調査（スノーモービル）の様子



▲フィンランド研修の様子

同級生と力を合わせ、道内の林業・木材産業を盛り上げる

北森カレッジで学んでみて

現在当学院に通っている2年生の椎名 名成（けんせい）さんに在学中に感じたことや、就職前の心境などを伺ってみました。

椎名さんは農業高校の森林科学科出身で、山林内での測量や樹木の成長を妨げる雑草を除去する下刈りなどの授業を通して林業へ興味を持ち、高校の授業の一環で訪れた当学院での説明を聞き、いきなり就職するのではなく、知識や技術を身に付けてから就職したいと考え、当学院への入学を決めたそうです。

これまでに印象に残っていることを聞いてみると、「1年生の頃に行った地域見学実習で、全道各地の様々な森林や作業現場、製材工場などを見学することができてとても勉強になりました。全国各地から集まった同級生たちと行動を共にすることで、すぐに打ち解けられたのもよかったです。」と話してくれました。

そして、在学中に高性能林業機械のオペレーターになりたいと考えるようになり、林業機械実習という機械操作



▲高性能林業機械（ハーベスタ）

を行う授業がどんどん楽しくなってきたと言います。

「授業で高性能林業機械を操作することもできるし、校舎内ではいつでもシミュレーターで練習ができるので、ありがたかったです。」とも話してくれました。

憧れのオペレーターになるため、長期就業実践実習で様々な地域の企業へ実習に赴き、春からは美幌町森林組合へ就職予定の椎名さん。「将来的には自分たちが中心となって作業班を任せてもらえるようになり、先生方に報告できるよう頑張りたい。」と意気込みを語ってくれました。

地元を離れ、美幌町へ移住して就職するということで、今までと環境が変わることについて聞いてみると、「一人暮らしに憧れがあるので楽しみではあるが、美幌町森林組合で自分がかまかやっついていけるのかという不安もあります。でも、仲の良い友人が近くに住んでいることや、同級生も一緒に就職するので心強い。」と不安とワクワクが入り混じった卒業前の心境を率直に話してくれました。

卒業後は当学院で学んだことを活かし、同級生たちとともに美幌町をはじめ、全道の林業・木材産業を盛り上げてくれることを願っています。

北森カレッジの使命

椎名さんは、高校で林業を学んでいましたが、当学院では初めて林業に触れる生徒がほとんどであり、自然の中で働きたい、林業や木材に興味があるという方が入学し、卒業後に全道各地の林業・木材産業関連企業等で活躍されています。

当学院は今後も道内各地の市町村や林業・木材産業関連企業・団体の皆様と共に林業・木材産業で活躍する人材の育成に努め、地域産業の持続的な発展に貢献していきたいと考えています。

そして、この記事を見て、一緒に道内の林業・木材産業を盛り上げたいという方がいらつしやいましたら、毎月学院説明会を開催しておりますので、お気軽にお申し込みください。



▲長期就業実践実習の様子



▲学院祭の様子

『なのみちカフェ』から

～地域創生のヒントを探る～



▲知床の雄大な自然と美しい海岸線を一望できる絶好のロケーション。晴天時は2階の窓から北方領土の「国後島」を見ることができる。

根室編



らうす
羅臼町

なのみちカフェ

鈴木知事が、北海道創生に向けて、様々な分野で活躍されている方をお訪ねし、その取組や地域への思いなどをお聞きしています。同行した職員から皆様にお伝えします。

令和7年9月1日訪問

K O B U S T A Y 編

今回まずご紹介するのは、昨年2月に羅臼町にオープンした「seaside cottage KOBUSTAY (こぶすたー)」です。

この施設は、天然羅臼昆布の伝統製法を受け継ぐ漁師のご夫婦が開業した1日1組限定の貸切宿で、根室海峡を望む2階建ての建物のうち、1階は宿泊者限定の体験スペース、2階はキッチンを備えた宿泊フロアとなっています。

この施設の大きな特徴は、宿泊とともに一次産業の現場に触れられることです。「羅臼昆布ヒレ刈り」や「昆布4種の引き出汁」、「鮮魚市場・荷揚げ見学」、夏季の「昆布洗い・天日干し」など、季節ごとに多様な体験プログラムが用意されています。



▶昆布のヒレ刈り体験。
一枚一枚ハサミで丁寧に整形する。

ご夫婦からは「水揚げ量ばかりに頼るのではなく、漁師自らが付加価値を高める必要性を感じた」、「素晴らしい昆布を手放さないために開業に踏み切った」とお話がありました。さらに、干場の様子や日々の暮らしを見てもらうだけでも、昆布漁の価値や奥深さを伝えられるという思いを大切にされていることも伺い、こうした言葉の端々から、地域の産業を守り、次世代につなごうとする決意が強く伝わってきました。

また、宿泊者の中には、体験を通じて羅臼や漁業に関心を深める子どももいるとのこと、こうした出会いが漁業の担い手確保の一助となり得ることは、地域の発展にとっても大きな意義があると感じました。

湊屋町長からは「昆布は日本のだし文化を支える世界的にも貴重な存在であり、その価値を北海道の生産者がしっかりと支えていることをKOBUSTAYが発信してくれて大変心強い」とお話があり、この施設の取組が、町にとっても大きな財産となっていることが窺えました。

羅臼の景観、食、暮らしを体感しながら、昆布漁の価値と魅力を正面から伝えるKOBUSTAYに、今後多くの方に訪れていただけることを願うとともに、北海道が誇る一次産業の持続的な発展にお力添えをいただきたいと思えます。



当日の知事の言葉から

昆布は日本の食を支える原点とも言える存在です。

昆布漁の体験を通じて生産の苦労や価値に触れることは、生産者と消費者の距離を縮め、一次産業への理解を深める大切な機会になるだけでなく、日本の食文化を守るうえでも重要です。



▲昨年9月に完成し、水素精製・CO₂分離回収の実証実験を行った。左側に写るのが、旧炭鉱の立坑槽（たてこうやぐら）。



空知編

みかさ
三笠市

令和7年11月4日訪問

三笠水素製造プラント編

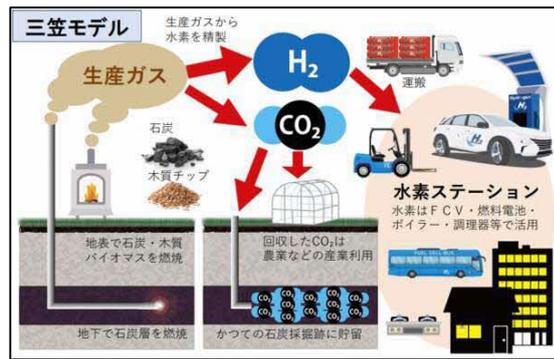
事業の概要

次に紹介するのは、三笠市が大学や企業と連携して進めている「ハイブリッド石炭地下ガス化事業」の水素製造プラントです。

プラントは、かつての炭鉱を象徴する立坑槽のすぐ前に立地しており、化石燃料から新エネルギーへと移り変わる時代の流れを、まさに一枚の風景として感じる場所でした。

三笠市では、地下の石炭層に酸素を送り込み燃焼させ、発生したガスから水素を抽出し、同時に生じる二酸化炭素は地下に戻すという革新的な技術開発を進めています。今年度は、水素精製やCO₂分離回収など、将来の水素サプライチェーン構築に欠かせない技術の実証に取り組んでおり、室蘭工業大学、エア・ウォーター、大日本ダイヤコンサルタント、市が連携し、新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）の支援も受けながら着実に研究を深めています。

西城市長からは、「2008年、副市長時代に始めたこの挑戦が、当時は『新しい産炭地技術』とは理解されず苦労した。しかし今では、国内外への展開が視野に入るところあり、陸域だからこそ世界に



広がる余地がある」とこの事業への強い期待が語られました。

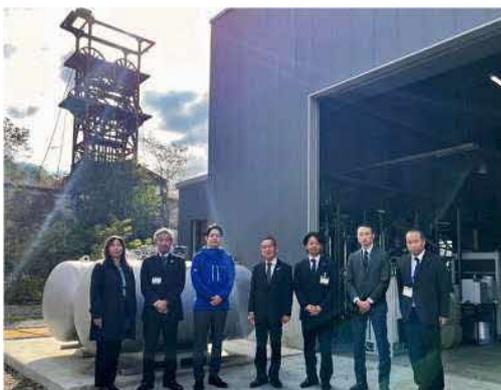
また、市の担当者からは、完成したプラントには250名が見学に来れるなど技術への関心が高まっていること、さらには水素で調理した鹿肉や鶏肉が好評であったエピソードが紹介され、水素の利活用を身近に体感できる環境づくりが着実に進んでいることが窺えました。

三笠市の取組は、ゼロカーボン北海道に向けた未来を先取りする挑戦であり、旧産炭地に新たな役割をもたらす可能性を秘めています。

当日の知事の言葉から

私も夕張市長時代に石炭の利活用に取り組んできました。当時と現在では環境がかなり変わっています。

水素社会の実現に向けては、インフラ面の整備や理解促進など、取り組みまなければならない課題もまだまだ多いですが、三笠市の挑戦をこれからも応援しています。





若者や女性に選ばれる北海道に向けて

地域おこし協力隊座談会

プロフィール（写真奥右から順に）

湧別町地域おこし協力隊 金子 友美さん

札幌市出身28歳。友人が移住したことをきっかけに町の良さに惹かれ、令和7年8月から湧別町の地域おこし協力隊として活動。

むかわ町地域おこし協力隊 三上 彩加さん

札幌市出身36歳。家族が飲食店を開業するにあたり移住を決め、令和6年7月からむかわ町の地域おこし協力隊として活動。

二セコ町地域おこし協力隊 野村 真里さん

札幌市出身32歳。自分を見つめ直した時に、人生でやりたいこと（ヨガやイベントなど）をするため、令和7年5月から二セコ町の地域おこし協力隊として活動。

浜中町地域おこし協力隊 吉井 萌里さん

福井県出身29歳。大学生アンバサダー事業がきっかけで町とつながり、協力隊募集を知って移住を決意し、令和7年4月から浜中町の地域おこし協力隊として活動。

大樹町地域おこし協力隊 大場 さくらさん

埼玉県出身34歳。画家として活動しており、コロナ禍を契機に、元々考えていた北海道への移住を早め、令和5年8月から大樹町の地域おこし協力隊として活動。

厚沢部町地域おこし協力隊 北村 奈津希さん

静岡県出身34歳。大学生の時に「アウトキャンパス事業」で訪れて以来、人と広大な自然に魅力を感じて、令和7年7月から厚沢部町の地域おこし協力隊として活動。

道では、「若者や女性に選ばれる地域づくり」という新たな視点を組み込みながら、北海道創生の施策を展開していくことを検討しており、その参考とするために、各地で地域おこし協力隊として活躍されている若者や女性の皆様にお集まりいただき、ご意見を伺いました。今号ではその座談会の一部をご紹介します。

「まずは道外から移住されてきた方が、北海道を選んだ理由と住み始めてから思ったことを聞かせてください。」

北村さん「農作物も畜産物も海産物も豊富で美味しく、自然の広大さは他の都府県にない迫力があり、とてもいい環境だと思います。しかし、実際に住んでみると子育て世帯を支援する体制が足りていないと感じており、誰か話せる人がいたり、声をかけてくれる人がいたり、育てる親を見てフォローしてくれるような環境であればもっと心強く安心して子育てができると思います。」

吉井さん「一緒に移住してきた隊員がいます。その方は新卒で入った会社を辞めてきているんですが、学生の頃に観光で訪れたことをきっかけに道東の自然が好きになり、いつか移住したいと考えていたと話していました。私も学生時代に道東に訪れたことがあり同じ思いから移住を決めたので、学生時代に地方に行く経験をもっと作つたらいいと思います。そうして訪れた人と地域の人たちがつながれば、将来的に移住先を検討する際に『頼れる人がいる地域』という安心感から候補の一つとなり得ると思います。」

大場さん「大学生がまた来たくなるのはUターンとつながっていると私は思っていて、地元出身者が大人になって帰って来たくなる環境と、出身ではない大学生がその地域を再訪したくなる環境は似ているところがある気がします。10代から20代で地域から出ていくのは仕方ないと考えていて、一度都会に行ってみるのも大事だし、自分たちに合う環境が他にあるかもしれない。ただ、帰ってきたいと思っている人が帰って来れないのは駄目だよなという話をしています。思いはあるのに環境が整っていないかったら、その人にとっては悪いことなのでそこをどうにかしたら学生が戻ってくることにつながるかなと思いました。」

また、移住を考えるとときに『仕事がある』ことも大きいと感じます。移住相談を受けたときに、大樹町には都会にあるような正社員の募集は少ないと伝えます。道外から来られる方が、地域でも都会と同じように会社勤めができるイメージでいると、仕事がないと感じるかもしれません。」

次に、道内で出身地と違う地域に移住した方からも、理由と住み始めてから思ったことを聞かせてください。

野村さん「まず選んでもらう観点でいうと、二セコは町としてのブランド力が高いので選ばれやすいというのがあると思うんですけど、友人が最近二セコに引っ越して家を買ったので自分も移住したとか、きっかけがある方が多いかなと思います。」

ます。誰も知り合いのいない土地で一人暮らしするのって結構なハードルがあるのでは。

移住や地域おこし協力隊といった新たな風が吹く一方で、定住という地に足のついた仕組みづくりが、これからの二セコの大きなテーマだと感じます。若い世代がそれぞれの専門性や個性を活かせる『受け皿』をどう整えていくか。単なる人口の増減ではなく、この街を愛する人たちの『心の充足感』に目を向ける時期に来ていると思います。町と町民が、移住者と手を取り合い、理想とのギャップに悩む方を少しでも減らしていく。そんな『寄り添う仕組み』を構築することが、私たちの歯がゆさを希望へと変える鍵になると思っています。」

三上さん「むかわ町は、協力隊全体の定住率はものすごい低いですね。去年退任された方も5、6人いるんですけど、定住している方は1人しかいない。どのような思いでむかわに来て、何を感じてむかわから出ていくのかというのも分かっていない。どうしてこの人が出て行ったのか、どうして定住してくれなかったのか、ちゃんとした明確な理由を聞けず、皆さんいなくなっている方がほとんどで、本当はむかわで住み続けたかったんだけど、仕事がない。じゃあもう出ていくしか方法はないとなって出て行っちゃったとか。」

大場さんもおっしゃっていましたが、「仕事がある」ということは定住の大きな要素ということですね。

金子さん「湧別町は、役場の仕組みとしてもやりやすい環境だなというところと、起業など若い人が何かチャレンジしてみたいときに、いろいろ支援してくれたり、この人に次つないでみるよって言ってくれる人がいるので、全体的に挑戦しやすい環境なのかなと思いますね。」

ただ、北海道全体の課題にはなりますが、地方での、特に年代世代でのジェンダーバイアスの意識改革、キャリアアップや賃金における男女間格差の是正が必要だと思えます。仕事における男女間格差の是正はなかなか難しいとは思いますが



が、そこに踏み込んで経営者たちが理解を深めないに進まないですよ。地域の組合でのジェンダーやキャリア研修などで少しずつ意識改革をしていくべきだと思います。起業でも就業でも、地域に女性活躍のロールモデルがいることで若い女性の転出減少につながるのではないのでしょうか。

また、男女限らず、道外でキャリアを積んできた方が北海道に来ると収入などの不安が少なからずあると思います。個人事業主など自分の仕事を持ち込んで生計を立てられる見込みがあるなら別ですが、どこかに就業する場合は雇用主が兼業に理解があるなど、地域で柔軟に活動できる環境づくりが必要なのではないでしょうか。これには役場や商工会などの協力も必要だと思います。」

(聞き手・北海道総合政策部
地域創生局地域戦略課
地域創生推進室長 岡田茂也
主任 藤原めぐみ)

道では、地域おこし協力隊制度の更なる推進を図るため、「地域おこし協力隊サポート推進室」において、道内自治体の募集情報をはじめ、隊員活動紹介やイベント・研修会情報などを発信しています。



▶「協力隊やるなら北海道！」ポータルサイト

ほしい情報がきっと見つかる！ 北海道移住に役立つ情報サイト・SNS

移住ポータルサイト 「北海道で暮らそう！」

北海道の市町村情報をはじめ、「しごと」や「住まい」など、暮らしに必要な情報をまとめて発信中！



Monthlyほっかいどう

北海道の移住関連イベントの情報が満載！！



「北海道で暮らそう！」 公式SNS

北海道の移住イベント情報など随時配信中！まずはSNSで、北海道とつながりませんか？



Instagram



Facebook



LINE

DOORS,hokkaido

道内各地のイベント、暮らしやコミュニティ、新しい「かかわり方」を実践する人たちの情報等、北海道の関係人口情報を発信中！



北海道型ワーケーション ポータルサイト

個人・企業の皆様の多様なニーズにオーダーメイドで対応する「北海道型ワーケーション」をご案内しています。



公式YouTube 「移住だべさ！北海道チャンネル」

移住PR動画や移住者インタビュー、北海道の仕事や地域でのワーケーション動画など100本以上公開中！



「創る」バックナンバーは、“ほっかいどう応援団会議ポータルサイト”へ

バックナンバーへ

ほっかいどう応援団会議

🔍 検索

URL : <https://hkd-ouendankaigi.jp/info/tukuru.html>